

ヤマトバッタ *Epacromius japonicus* (Shiraki)

【選定理由】

本種は、主にまばらに草が生える海岸の砂地に生息する。また、類似環境を有する内陸部の大きな河川の河川敷にも生息することがある。本種の記録されている県内のこうした環境の一部では、観光客などの増加による踏みつけやサンドバギー（レジャー用自動車）の乗り入れなどで状況は悪化しつつある。また、大小のダム建設に伴って砂の堆積が乏しくなったため、砂浜・砂地の面積が減少して、本種の生息に悪影響を及ぼしている地域もある。

【形態】

中型のバッタ。体長は♂27~32mm、♀35~41mm。♂・♀とも有翅。全体に灰白褐色で黒褐色の大小の斑点を密布する。頭・胸部背面は淡い赤褐色。前翅は淡い赤褐色で前縁部は斑模様となる。後翅は基方はごく淡い水色で黒褐色の翅脈以外には模様はない。後脚腿節の外側は体色と同じ色模様だが内側はほぼ一様に灰白褐色で中央に大きな黒紋が二つある。

同所的に生息するイボバッタ、マダラバッタ、クルマバッタモドキなどは本種と酷似するので注意が必要であるが、後翅基部の淡い水色の部分で区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美半島や知多半島の一部の海岸砂丘に見られるが、稲沢市（旧祖父江町）木曾川沿いのように河川敷の砂原にも生息する（岡田, 1990；長谷川, 1991）。

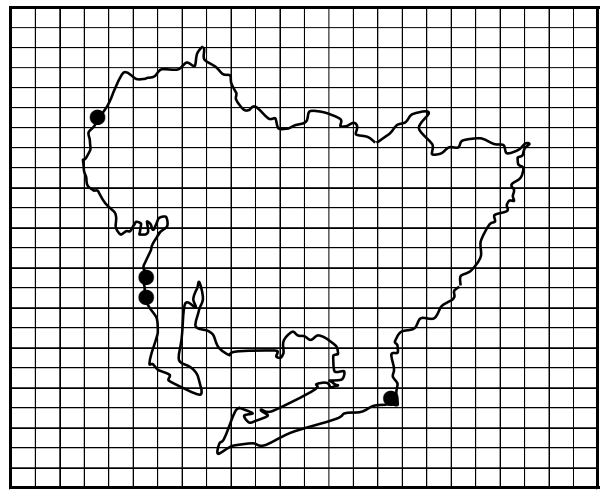
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

韓国。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

まばらに草が生える海岸の砂浜もしくは河川敷砂地に生息する。♂・♀とも発達した翅があり、数メートルの距離であれば飛んで移動する。体色は生息地の環境によく似た隠蔽色となっており、翅を畳んだまま静止しているときは見出しにくい。

【現在の生息状況／減少の要因】

稲沢市（旧祖父江町）の生息地は、人による踏みつけや河川敷砂地へのサンドバギーや自動車の乗り入れなどで環境が悪化している。ここでは1980年に採集された個体を最後に記録されていない（岡田, 1990）。

常滑市の生息地は、防波堤の外側（海側）にある長さ300m、幅50mほどの小さな砂浜である。まばらに海浜植物が生える良好な環境である。しかし、一部が資材置場として使用されたため局地的に環境は悪化した。

豊橋市の生息地は、ウミガメ保護のために砂浜への自動車の乗入が禁止されているため、本種の生息にとって好都合である。現状が維持されれば本種の存続に問題はない。2013年の豊橋市、2018年常滑市の現地調査では、生息地は健在であった。

【保全上の留意点】

まばらに草が生えるきれいな砂浜・砂地を継続して維持すること。冠水などのため、ヘドロや土が被さった砂地はよくない。逆に、草が茂りすぎるとマダラバッタやクルマバッタモドキのほう優勢となってしまうので注意が必要である。生息地への無差別かつ過度の立入りは控えること。

【引用文献】

長谷川道明, 1991. 豊橋市表浜におけるヤマトマダラバッタとハマズズの採集例. 佳香蝶, 42 (164): 63
岡田正哉, 1990. 愛知県の直翅目(1). 愛知県の昆虫, (上): 87-93. 愛知県.

【関連文献】

日本直翅類学会編, 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑: 541. 北海道大学出版会, 札幌.
市川顕彦ほか, 2016. バッタ目. 日本直翅類学会(編), 日本産直翅類標準図鑑: 159, 369. 学研プラス, 東京.

(水野利彦)